

ちょうだい
「頂戴」

相手に頼みごとをする際、気軽に「それを取って頂戴」「早くして頂戴」など、「下さい」のかわりに「頂戴」を使います。

また対照的に、自分が何かをいただく時の「十分頂戴しました」「食事を頂戴いたします」など、丁寧な言葉使いの「頂戴」もあります。

後者の方が本来の意味に近いのかもしれませんが。

もともとは、仏さまの教えである経典を、頭の上に載せ頂くことを意味しており、最高の敬意を表す行いのことです。それが、物をもらった際にその物を頭に頂く行為となり、それから物を頂く時に使われるようになりました。

「食事を頂戴いたします」は「いただきます」と同じ意味でしょう。肉をはじめとして野菜・穀物など、動植物のいのちを頂くことで、私たちは自らの命を維持しています。さらに、その食事が食卓に上るまでは、農業や漁業などの皆さま、流通に関わる皆さま、加工や調理に関わる皆さま、ご家庭の場合はそれを料理するご家族等々、多くの皆さまの手を経ています。

食事のはじめの「いただきます」は、動植物のいのちを頂戴し、多くの皆さまの手間を頂戴しますという感謝の言葉といえましょう。

ちなみに、食事の終わりの「ごちそうさまでした」の“馳走”は走り回ること、奔走することを表しています。お客様のために馬を走らせて食材や器を集め、走り回って用意することから、もてなしや、手をかけた豪華な食事を頂いた際に「ごちそうさまでした」と言いました。たとえ豪華で特別な食事でなくても、多くの手間を経なくては食事はできません。そして大切な動植物のいのちをいただくことにはありません。ですから、ありがたく頂戴しましたと感謝の気持ちを込め「ごちそうさま」と挨拶をするのです。

仏さまの教えを頭の上にいただくという最高の敬意を表す行為から生まれた「頂戴」という言葉。それが丁寧な感謝を表す言葉となりました。

「いただきます」、「ごちそうさま」はそれを挨拶という形で、習慣にした言葉といえるでしょう。

『 禅のこころ - 曹洞宗 - 』

「頂戴」という言葉の意味をかみしめながら、食事の際に「いただきます」「ごちそうさま」と唱えていきたいものです。

— 終 —